

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370031

研究課題名(和文) 現代における自由意志の問題 理論と実践の統一を目指して

研究課題名(英文) The problem of free will in the contemporary situation: toward the unification of theoretical and practical considerations

研究代表者

村田 純一 (MURATA, Junichi)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：40134407

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：科学技術の発達した現代においては、改めて自由意思をめぐる議論が活発に論じられているが、他方で、多くの議論では、自由と決定、自立と依存、といった伝統的な二元論的見方が前提されている。本研究では、こうした前提自体を問いに付き、身体をもって環境とかかわりながら生きている人間のあり方を基本に据えて問題を捉え直すことを行った。こうした「生態学的現象学」と呼びうる見方を通して確認したのは、環境によって制約されながら同時に支援されるという日常的な行為のあり方に視点を据える重要性であり、日常性を失っている障害者の行為のあり方を考察する意義である。

研究成果の概要(英文)：Motivated by the contemporary situation, in which science and technology are highly developed, the free will problem is currently widely discussed in various fields. However, many discussions presuppose the traditional dualistic distinction between freedom and determinism, or autonomy and heteronomy. In our research, we criticize this presupposition, based on the view that human beings are always living in the embodied engagement with the world. Through this view of "ecological phenomenology," we have confirmed it is necessary to focus on the structure of actions in everyday lives, in which our actions are constrained but at the same time supported by the environments. This view also helps us to understand the problems concerning free will and autonomy of handicapped persons.

研究分野：現象学・科学哲学

キーワード：自由意志 決定論 生態学的現象学 自己決定 日常性

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代における科学技術の発達、人間観に大きな影響を与えてきた。そのひとつに自由意志をめぐる問題がある。脳科学者の B・リベットは、独自の実験状況を構想することによって、身体運動を起こそうとする自由な意志の発動に先だって脳のなかで運動の準備をつかさどる準備電位が生じていることを見出し、科学者と哲学者を巻き込んだ大きな論争を引き起こすことになった。心理学者や認知科学者は、さまざまな実験によって、自由な意思決定にもとづくと思われる決断や行為が、無意識の要因によって引き起こされたり、他者によって操作されたりしたものである場合のあることを印象深く示している。こうした実験結果にもとづいて、多くの科学者は、自由意志は「錯覚」にすぎないという結論を導き出している。

(2) こうした科学の動きに呼応するような仕方で、哲学の世界でも、おもに分析哲学系の論者を中心にして、自由意志と決定論をめぐる議論が盛んになってきた(例えば、R. Kane, *The Oxford Handbook of Free Will*, Oxford University Press, 2002. 参照)。こうした議論では、アウグス ティヌスやホッブス、あるいは、ロックやカントなど、伝統的哲学のなかで議論されてきた意志の自由をめぐる問題を、新たな知見にもとづいて展開することが試みられている。しかしながら、こうした議論の多くでは、自由意志は決定論との対比の枠組みのなかで考えられているために、自由意志の発動は、一切の要因から独立に成立することであるかのように考えられることが多く、まるで無前提、無条件のもとで初めて「自由」が実現しうると見なされるかの如くである。実際、これまでの哲学史のなかで自由意志と決定論の論争がなされる場合、状況から切り離された意志という前提のもとで議論がなされることが多かったために、両立論と非両立論(自由意志論と(硬い)決定論)の間で、決着のつかない論争が続いてきた。しかしながら、こうした「状況から切り離された意志決定」という想定は、広い意味での心身二元論を前提してはじめて可能になるものである。それに対して、二元論を避けて、「身体化され、環境内に状況づけられ、環境内の事物や人間と相互作用している人間」という観点を基本とするならば、人間の意志の生成は、さまざまな身体的、環境的要因によって、制約を受けながら、同時にそれらによって促され支持されて可能になるものと考えられることができるはずである。

2. 研究の目的

(1) 研究代表者は、これまで人間を「環境内存在」としてとらえ、人間の経験は環境に状況づけられながら環境と相互作用することによって成立するという見方、すなわち、「生態学的現象学」と呼ぶことのできる

見方のもとで、知覚や行為などに関する分析を行ってきた(『色彩の哲学』岩波書店 2002年、『わたし』を探検する』岩波書店、2007年、参照)。こうした観点にもとづくなら、自由意志と決定論という対立の枠組みとは違った仕方で自由意志をめぐる問題が考えられるはずである。本研究では、「自由意志の生態学的現象学」という観点の可能性と意義を、分担者の協力のもとで、さまざまな他の哲学的観点との相互批判を通して明らかにすることを目指す。

(2) 以上は、おもに理論的側面での自由意志をめぐる問題状況とそれに対応する研究の目的である。もうひとつの自由意志をめぐる現代の特徴は、それがさまざまな実践的脈絡のなかで問題になっている点である。たとえば、アメリカでは、ブッシュ政権時代に、エンハンスメント(人間増強)技術の発展を受けて、この技術の進展に関する倫理問題を扱う生命倫理に関する大統領委員会が組織され、そのなかでの議論の総括が『治療を越えて』という著作として出版された。この著作では、遺伝子操作、向精神薬の健常者による使用、など具体的な技術の使用に即して、さまざまな倫理問題が論じられた。興味深いことのひとつは、人間の欲望に従ってのエンハンスメント技術の無制限な使用は、最終的には、A・ハクスレーの描く『すばらしい新世界』のような逆ユートピアの実現を帰結するのではないかという疑念が表明されている点である。つまり、科学技術を無制限に使って個々人が自由意志を実現すると、最終的には、むしろ自由意志を無意味にしてしまうような状況を作り出してしまわないかというパラドクシカルな事態が指摘されているのである。エンハンスメント技術をめぐる問題はいまだ未来に属する面が多いが、現代の医療や介護の場面では、自由な自己決定という名目のもとになされるさまざまな決定が、一定の方向(たとえば脳死や安楽死)を誘導することになっている可能性が大きいのではないかという点が指摘されている。このような場面では、患者と家族の関係、そして、医師や看護師との関係などの多様な具体的な関係を考慮せずに個人の自由意志やそれにもとづく自己決定という概念を用いると、それらの概念が空虚になってしまう危険があるように思われる。研究分担者のひとり(田坂さつき)はこうした点を考慮しながら、介護現場での障害者の意志決定や ALS の患者とのコミュニケーションの意味などを具体的事例に即して考えることを行ってきており、また、もう一人の分担者(竹内聖一)は介護の現場での患者と看護師との具体的な関係に即して患者の意志決定のあり方を分析してきた。こうした現場に即してのこれまで得られた知見を参照しながら、「状況づけられた自由意志」という観点がどこまで有効かを問う実践的問題の解明が、本研究の第二の大きな目的である。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、この研究以前にすでに研究代表者や分担者がそれぞれの専門分野の領域で取り組んできた自由意志をめぐる研究を相互に批判し関連付け、「環境内存在」としての人間という観点をもとにした自由意志に関する新たな見方の意義と射程を明らかにすることが目標である。そのために、おもに、1. に挙げた理論的課題に取り組むために、哲学史のなかでの自由意志をめぐる議論を再検討する。古代ギリシア、中世、近代、そして現代の哲学の文脈のなかでなされてきた議論を批判的に再検討することによって、「生態学的現象学」の観点からの自由意志論の可能性と意義を明確化することを行った。具体的には、すべて公開の研究会や講演会として行うことにより、幅広い議論が実現するように工夫した。

(2) 自由意思をめぐる実践的問題を探るために、障害者の介護現場や医療現場での問題を具体的にとりだし、検討を行った。そのために、ALS患者との哲学対話や、障害者支援のためのモノづくりを大学での授業という形態を通して行った。

(3) 研究成果を教育現場に生かすために、研究代表者と分担者が属する学科で基礎演習向けの教科書を編纂することを行い、教科書を使った授業を実現することによって、成果を授業内で確認する作業を行った。

4. 研究成果

研究期間内には、数多くの研究者を招聘し、自由意思をめぐる多様な側面に関して議論を行った。その中で特に検討されたものの一つは、自由な行為とは「理由なき自己決定」として実現されるという高山守氏によるテーゼであった。一見すると、自由な行為は決定されていないということから考えて、行為の最終決定の場面では、何らの理由なしに選択がなされるはずであり、実際、そうしたことが行われていると考えることが自然なように思われるかもしれない。確かに、明確な選択肢を前にして、あれかこれか、という仕方での選択に迷い、最終的にははっきりした根拠なしに選択し、行為に及ぶこともないわけではないだろう。しかし、そうした場面は、日常生活の中ではまれであるし(日常生活とはそうした「深刻な」選択が問題にならない場面と言い換えることもできる)、ただだからといって、日常生活の中での行為が自由でないということにはならない。こうしてみると、「理由なき自己決定」という考え方は、ある特殊な場面を典型例とする偏った見方ということになる。むしろ、自由な行為の典型例を日常生活の場面に見ることによって、伝統的哲学の一面的な見方を超えて、より広い観点からの自由の問題を捉えることが可能になると考えられる。またそうした日常生活の例をモデルにすることによって、生態学

的現象学の観点の有効性が浮き出てくるように思われる。

(2) 日常生活の場面をモデルとして、自由意志の問題を捉えるという見方は、生態学的現象学のような見方のみに限られるわけではない。例えば、戸坂潤は、日常性の優位という観点から、自由と必然の対立を軸に行為のあり方を捉える哲学を「神学的」見方と批判し、むしろ日常生活に潜む「創造的」性格を強調している。このような見方は、自由意志の問題を「神学的」論争から具体的な生活の場面に置きなおして捉え返そうとする点で現象学的性格をもつものといえるだろう。また、(自身が障害者でもある)熊谷晋一郎氏は、「自立」と「依存」を対立的にとらえるのではなく、自立とは依存先を多様化することである、というテーゼを提出しているが、この見方もまた、日常性の中での「自由」のあり方を捉える新たな見方といえるだろう。以上のような議論を通して、生態学的現象学の観点からの自由意志論を、「日常性の中での自由意志」論という仕方での定式化することができた。これが一つの大きな成果である。

(3) ALS患者との哲学対話や、障害者介護施設での援助に使われるモノづくりなどの実際のあり方をおして、自由と決定論という対立図式の抽象性をさらに明確化することができた。また、研究代表者と分担者に加えて、ほかの哲学科の教員も加えたテキストづくりと、それをもとした授業や立正哲学会での学生を交えての対話によって、本研究での研究成果を教育の場面で検討する、という課題を実現することができた。これも大きな成果である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 17 件)

Tasaka, Satsuki, Loving and Knowing: On the interpretation of the Republic V, 414b3-480a13, 立正大学大学院紀要、査読有、32 巻、2016、1-22.

Yuasa, Masahiko、"Jetzt, in dem Augenblick" als Moment der freien Handlung: zur Interpretation der 'dritten Antinomie', 立正大学大学院紀要、査読有、2016、85-92.

竹内聖一、二種類の行為の知識、立正大学大学院紀要、査読有、32 巻、2016、63-109.

村田純一、痛み体験のパラドックス、東北哲学会年報、査読無、31 巻、2015、89-106.

[学会発表](計 13 件)

湯浅正彦、「知」の危機について—『意識の事実』講義からの証言、日本フィヒテ

協会第31回大会、2015年11月15日、
早稲田大学、東京
Takeuchi, Seiichi, Two Kinds of
Knowledge of Action, Taipei-Tokyo
International Workshop in Philosophy
“Knowledge and Action,” 2015年9月
18日, Soochow University, Taipei,
Taiwan,
田坂さつき、障がいや難病を生きる人た
ちとの哲学対話、第21回大学教育研究
フォーラム、2015年3月14日、京都大
学、京都
Murata, Junichi, Everydayness,
modernity, and the meaning of life, The
5th meeting of OPO (Organization of
Phenomenological Organizations), 2014
年12月11日, Murdoch University,
Perth, Australia.

〔図書〕(計 5 件)

金井淑子、松永澄夫、村田純一、湯浅正彦、村上喜良、田坂さつき、板橋勇仁、竹内聖一、春風社、哲学、はじめの一步(全4巻)、2015年、(56-105) (8-37, 88-113) (8-30, 59-126) (8-78)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 純一 (MURATA, Junichi)
立正大学・文学部・教授
研究者番号：40134407

(2) 研究分担者

湯浅正彦 (YUASA, Masahiko)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：70247188

田坂さつき (TASAKA, Satsuki)

立正大学・文学部・教授

研究者番号：70308336

竹内聖一 (TAKEUCHI, Seiichi)

立正大学・文学部・准教授

研究者番号：00503864

(3) 連携研究者

()

研究者番号：